

# オセアニア [豪州]



## 1 農・畜産業の概況

豪州の農畜産業は、国内総生産（GDP）の1.8%、就業人口で2.7%と、産業全体に占める割合は必ずしも高くない（2014/15年度（7月～翌6月））。しかし、同年度の総輸出額に占める農畜産物の割合は13.8%となっており、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積（7億7000万ヘクタール）の50%に相当する3億8456万ヘクタールが農畜産業に利用されており、その大半は牛や羊の放牧地および採草地であり、小麦などを栽培する耕地面積は、2619万ヘクタールにすぎない（2015年6月末現在）。

豪州の農場数は、2014/15年度は12万3091戸（前年度比4.2%減）とやや減少し、3年度連続の減少となった。また、農業従事者数は、高齢化による離農などにより2009/10年度以降減少が続いていたが、2014/15年度は、牛肉価格や前年度乳価の上昇などを背景に前年度に続き増加した（表1）。

経営形態では、肉牛、羊、酪農などの専業経営だけでなく、穀物などとの複合経営も多いことから、農業従事者全体の約8割が、何らかの形で畜産経営に携わっているとみられる。

農畜産業生産額は、2000/01年度以降、おおむね増加傾向で推移し、2014/15年度は543億7100万豪ドル（同5.4%増）となった（図1）。

内訳を見ると、牛（生体輸出用を含む）は115億4400万豪ドル（同35.1%増）と干ばつに伴うと畜の増加を受けて大幅に増加し、羊は羊肉価格の上昇を反映して31億9800万豪ドル（同21.1%増）となった。生乳は、乳製品国際価格が下落に転じたことを受け、47億2000万豪ドル（同1.6%減）とわずかに減少した。この結果、畜産物全体では269億3200万豪ドル（同17.7%増）となった。一方で、農作物全体は、小麦や綿実の生産額の減少が響き、274億3800万豪ドル（同4.4%減）となった。

表1 農場数などの推移

（単位：戸、千人、豪ドル）

区分／年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
農場数	135,447	135,692	128,917	128,454	123,091
農業従事者数	334.5	321.0	298.6	309.2	315.3
1農場当たり 農業粗所得	120,870	112,200	110,270	124,460	152,800

資料：ABS「Land Management and Farming in Australia」

ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、

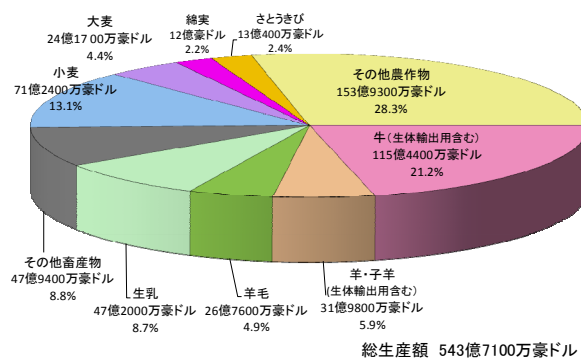
「Australian Farm Survey Results」

注1：年度は7月～翌6月。農場数、農業従事者数は各年度6月末時点。

2：農場施設評価額2万2500豪ドル以上の農場。

3：2014/15年度は暫定値。

図1 農畜産業生産額（2014/15年度）



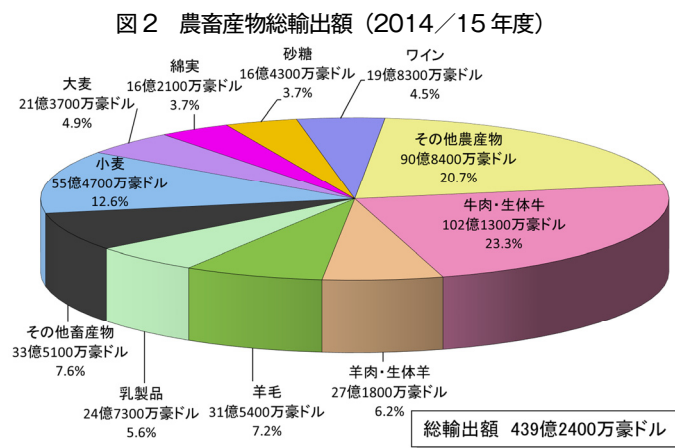
資料：ABARES「Agricultural Commodities」

注1：年度は7月～翌6月。

2：ABARESによる推計。

一方、2014/15年度の農畜産物総輸出額（FOB）は439億2400万豪ドル（同6.7%増）となり、そのうち畜産物輸出額は219億900万豪ドル（同19.5%増）と大幅に増加した。

内訳を見ると、牛肉・生体牛が102億1300万豪ドル（同39.6%増）、羊肉・生体羊が27億1800万豪ドル（同12.7%増）、乳製品は24億7300万豪ドル（同9.2%減）となった（図2）。



資料：ABARES「Agricultural Commodities」

注：年度は7月～翌6月。

## 2 畜産の動向

### (1) 酪農・乳業

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営がほとんどであり、気候条件に恵まれ、牧草の生育が良いビクトリア（VIC）州を中心に行われてきた。しかしながら、最近では、同州でも度重なる干ばつのため、穀物や乾草などの購入飼料の利用も多くなっている。

また、生産される生乳の約8割が加工向けであり、さらに、製造される乳製品の6割以上が輸出向けという、輸出指向型の産業である。

以上のことから、生乳生産は、天候や牧草の生育状況などによって大きく変動するとともに、酪農経営は、乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴がある。

#### ① 主要な政策

生乳の需給管理を目的とした制度・政策は特になく、生産者は、国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。デーリー・オーストラリア（DA）は、生乳の販売時に課される生産者課徴金などを財源に、販売促進や研究開発、マーケット情報の提供などを一括して行っている。

### ② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、2008年以降、おおむね安定的に推移しており、2015年は174万頭（前年比3.3%増）となった（表2）。一方、酪農家戸数は、長期的には減少傾向にあり、2015年は6128戸（同2.9%減）となった。なお、大規模で効率的な農家への集約という傾向が続いており、1戸当たり経産牛飼養頭数は、2015年には284頭（同6.4%増）となっている（図3）。

表2 乳牛飼養頭数などの推移

（単位：千頭、戸、頭）

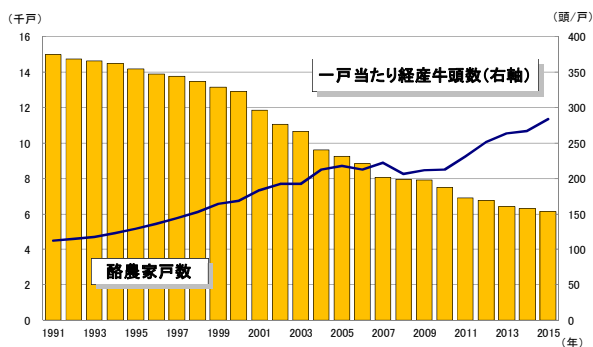
区分/年	2010	2011	2012	2013	2014	2015
乳牛飼養頭数	2,542	2,570	2,733	2,834	2,807	2,845
経産牛飼養頭数	1,596	1,589	1,700	1,688	1,684	1,740
酪農家戸数	7,511	6,883	6,770	6,398	6,308	6,128
1戸当たり経産牛頭数	212	231	251	264	267	284

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、

Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注：各年6月末時点。

図3 酪農家戸数と1戸当たり経産牛頭数の推移

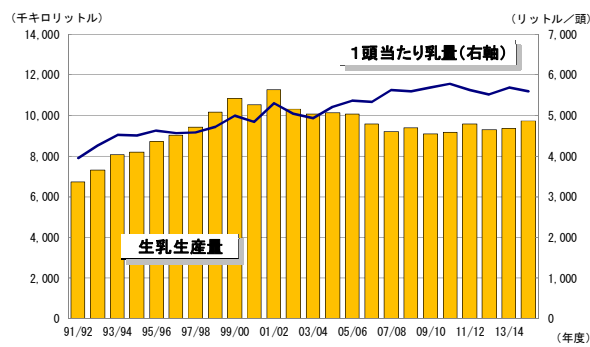


資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

生乳生産量は、1990年代から2000年代初頭までは、ガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待などを背景に、増加傾向で推移してきた。しかしながら、2002/03年度から2009/10年度までは、干ばつなどの影響により減少傾向で推移した。その後、2011/12年度は、気候条件の好転や、かんがい用水を利用した生産地域での水利用環境の回復から増加した。2012/13年度は、乾燥気候の影響から減少したが、2013/14年度は、年度の後半にかけて気候条件が好転したことでわずかに増加した。2014/15年度は、世界的な需要増に後押しされる形で973万キロリットルと2年度連続で前年度を上回って推移した(図4)。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧に適した系統へと改良が進められたこともあり、日本や米国などと比較して少ない。近年は、補助飼料の給与増や遺伝的改良より、着実に増加してきたが、2014/15年度は、5593リットル(同1.7%減)とわずかに減少した。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



資料：ABARES 「Agricultural Commodity Statistics」

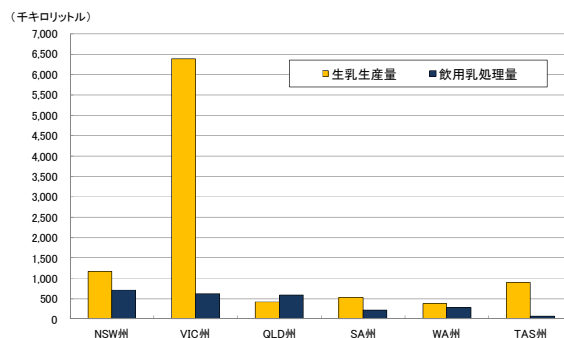
注：年度は7月～翌6月。

加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇し、2004/05年度には生乳生産量の8割程度を占めた。しかし、人口の増加に伴い国内の飲用乳需要が堅調に推移していることから、2014/15年度は74.5%に低下している。

生乳生産量を州別に見ると、VIC州が全体の65.7%を占め、最大の酪農地域となっている。ただし、飲用乳向けの生乳処理量は、大消費地であるシドニーを擁するニューサウスウェールズ(NSW)州が最も多い(図5)。

このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとに決められる生産者乳価については、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とでは、大きな差が生じている。

図5 州別生乳生産量(2014/15年度)



資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：飲用乳処理量は州間移動を含む。

### ③ 牛乳・乳製品の需給動向

2014/15年度の主要乳製品の生産量については、中国をはじめとしたアジア地域向けの旺盛な輸出需要に支えられ、最大の輸出品目である脱脂粉乳とチーズの生産量が、それぞれ23万3835トン(前年度比10.8%増)、34万3956トン(同10.4%増)と増加したことで、前年度を上回った。一方、全粉乳とバターについては、それぞれ9万9025トン(同21.6%減)、10万1511トン(同0.2%減)と前年度を下回った(表3)。

表3 牛乳・乳製品生産量の推移

(単位：千キロリットル、千トン)

区分/年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
生乳	9,100	9,574	9,317	9,372	9,731
- 飲用向け	2,316	2,388	2,445	2,464	2,481
- 加工向け	6,784	7,186	6,872	6,908	7,250
バター	96.3	100.6	99.0	101.7	101.5
バターオイル	26.2	19.2	19.2	14.4	17.2
チーズ	338.7	346.5	338.3	311.5	344.0
脱脂粉乳	222.5	230.3	224.1	211.0	233.8
全粉乳	151.3	140.4	108.8	126.3	99.0

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

- 注1：年度は7月～翌6月。
- 注2：生乳の単位は千キロリットル。
- 注3：乳製品の単位は千トン。

2014/15年度の主要乳製品の輸出量は、主要な輸出先のロシアにおける禁輸政策の影響を受けたバターおよび中国の需要減少の影響を受けた全粉乳を除き、主要品目で前年度を上回った。2014/15年度の主要乳製品の生産量に占める輸出割合については、全粉乳は75.9%、脱脂粉乳は79.8%と約8割を占めている。また、バター(バターオイルを含む)、チーズについても、それぞれ34.2%、46.1%と、いずれも3分の1以上となっている(表4)。

表4 牛乳・乳製品輸出量の推移

(単位：千トン、千キロリットル)

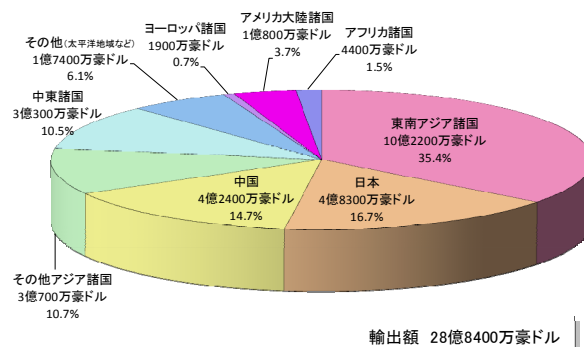
区分/年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15	輸出割合(14/15)
バター	33.4	33.6	39.3	39.8	31.0	34.2%
バターオイル	18.1	12.1	11.5	7.6	9.6	
チーズ	163.0	160.9	174.1	150.4	158.5	46.1%
脱脂粉乳	155.3	141.3	146.9	143.2	186.7	79.8%
全粉乳	125.9	116.1	103.8	102.2	75.2	75.9%
飲用乳	70.9	87.7	106.5	118.1	147.9	6.0%

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

- 注1：年度は7月～翌6月。
- 注2：乳製品の単位は千トン。
- 注3：飲用乳の単位は千キロリットル。

乳製品の輸出は、日本、中国、東南アジア、その他のアジア諸国向けの割合が高く、輸出額ベースでアジア地域が全体の77.5%と、圧倒的なシェアを占めている(図6)。特に粉乳類は、育児用粉ミルクなどの需要が多い中国および東南アジア諸国向けを中心に、脱脂粉乳、全粉乳ともに約7割はアジア地域向けに輸出されている。

図6 地域別乳製品輸出額(2014/15年度)



資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

2014/15年度の主要乳製品の1人当たり消費量のうち、飲用乳は105.0リットル（同0.8%減）とわずかに減少した（表5）。消費トレンドを見ると、牛乳から成分調整牛乳や加工乳へと移行しつつあるものの、カフェにおける牛乳の間接消費や、量販店における低価格牛乳の販売拡大によって、飲用乳の消費量はおおむね安定的に推移している。

また、乳製品については、ヨーグルトは同7.2キログラム（同2.7%減）、チーズは同13.6キログラム（同0.7%増）、バターは同4.0キログラム（同2.6%増）といずれも近年は安定的に推移している。

表5 1人当たり年間牛乳・乳製品消費量の推移

（単位：リットル、キログラム）

区分/年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
飲用乳	104.5	106.0	106.7	105.8	105.0
チーズ	13.6	13.4	13.5	13.5	13.6
バター	3.9	3.9	3.7	3.9	4.0
ヨーグルト	7.3	7.4	7.4	7.4	7.2

資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

2：飲用乳の単位はリットル。

3：乳製品の単位はキログラム。

#### ④ 乳価の動向

酪農・乳業は輸出指向型産業であることから、生産者乳価は、乳製品の国際市場の影響を強く受ける。2009/10年度は、世界金融危機（2008年9月）以降の経済低迷などから、前年度に引き続き下落した。2010/11年度から2011/12年度にかけては、堅調な乳製品国際価格を受けて上昇した。2013/14年度は、アジア地域や中東諸国からの強い需要に伴う乳製品国際価格の上昇により前年度比27.4%高となったものの、2014/15年度は、世界的な供給過剰と、主要な輸入国である中国の需要減退により乳製品国際価格が下落したことを受け、同5.3%安の1リットル当たり48.5豪セントとなった（表6）。

表6 生産者乳価の推移

（単位：豪セント/リットル）

年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
生産者乳価	43.2	42.0	40.2	51.2	48.5

資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注：年度は7月～翌6月。

## (2) 肉牛・牛肉産業

豪州の肉用牛生産は、酪農と同様、牧草（放牧）に依存しており、牛肉生産量の約 7 割を輸出に仕向ける輸出指向型産業である。

肉用牛は、粗放的な飼養管理が可能のため、乳牛に比べると利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地帯などの自然条件が厳しいところでも、熱帯品種などを選択的に導入することによって飼養が可能となる。このため、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土で、多種多様な品種による生産が行われている。

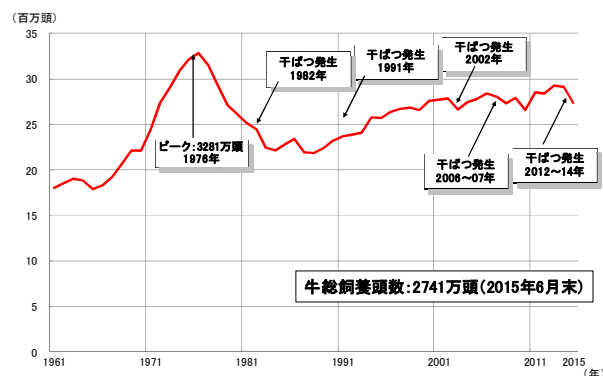
### ① 主要な政策

肉用牛や牛肉の需給管理を目的とした制度・政策は特になく、生産者は、国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州家畜検疫検査局（AQIS）などの政府機関が家畜衛生政策を、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）などの業界団体が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを行っているが、これらの事業財源の多くは、生体の取引（販売）時に課される生産者課徴金によるものである。

### ② 牛の飼養動向

豪州の牛飼養頭数（乳牛を含む）は、長期的な推移を見ると、1960年代後半から70年代半ばにかけて、世界的な牛肉需要の増大を背景に急激に増加し、1976年には過去最高の3281万頭を記録した。その後、第二次オイルショック（1979年）などによる世界的な牛肉需要の減退や肉用牛経営の悪化、大干ばつの発生（1982年）などにより、1984年には2216万頭と、ピーク時に比べ3分の2まで減少した。それ以降は、主に干ばつなど天候の影響を受けながらも緩やかな増加傾向で推移している（図7）。

図7 牛飼養頭数の長期的推移



資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、  
「Agricultural Commodities」

注1：乳牛を含む。

2：各年6月末時点。

2000年以降は、2006年から2008年にかけて大規模な干ばつが発生したが、世界的な牛肉需要の高まりを背景に、飼養頭数は堅調に増加し、2013年には2929万頭超の高水準となった。

しかし、2012年後半から2015年にかけて東部で再び大規模な干ばつが発生したことで牛の早期出荷や繁殖雌牛の淘汰が進み、2015年6月末時点の牛飼養頭数は2741万頭（前年比5.8%減）とやや減少し、このうち肉用牛はおよそ2460万頭（同6.4%減）となった（表7）。

表7 牛飼養頭数の短期的推移

（単位：千頭）

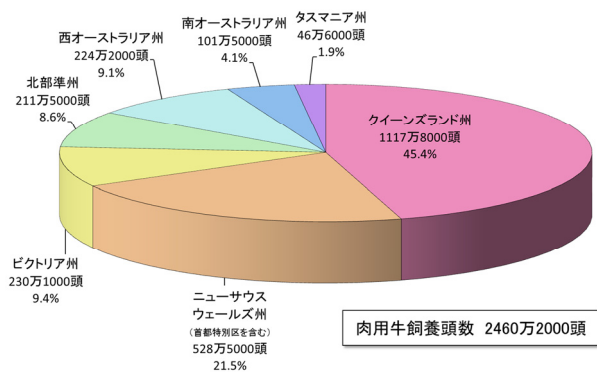
区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
肉用牛	25,936	25,685	26,457	26,296	24,602
乳用牛	2,570	2,733	2,834	2,807	2,810
合計	28,506	28,418	29,291	29,103	27,412

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、  
「Agricultural Commodities」

注：各年6月末時点。

肉用牛の飼養頭数を州別に見ると、クイーンズランド（QLD）州が全体の45.4%、NSW州が21.5%、VIC州が9.4%と、東部3州で全体の8割近くを占め、肉用牛供給の根幹を成している（図8）。

図8 州別肉用牛飼養頭数（2015年6月末時点）



資料：ABS「7121.0 - Agricultural Commodities, Australia, 2014-15」

### ③ 牛肉の需給動向

#### ア 生産動向

牛と畜頭数（子牛を含む）は、2006年から2008年にかけて大規模な干ばつが発生したことで増加した後、天候の回復による牛群再構築から減少傾向にあった。しかしながら、2012年後半から2015年にかけて、QLD州を含む東部での干ばつの進行に伴い再び増加に転じ、2014/15年度は1010万3000頭（前年度比6.7%増）と、かなり大きく増加した（表8）。

平均枝肉重量は、と畜頭数に占める穀物肥育牛の割合の増加や、生体牛輸出の需要を高まりを受け、北部の比較的重量の軽い牛は生体輸出に仕向けられることから、増加傾向で推移してきた。2014/15年度は、干ばつによる早期出荷の影響はあるものの、穀物価格安に伴うフィードロットでの飼養頭数増加を受け、278.4キログラム（同0.7%増）とわずかに増加した。

以上から、2014/15年度の牛肉生産量（子牛肉を含む。枝肉重量ベース）は、266万2000トン（同8.0%増）となった。

表8 牛肉需給の推移

（単位：千頭、千トン、キログラム）

区分/年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
と畜頭数	8,097	7,873	8,457	9,473	10,103
生産量	2,133	2,115	2,245	2,464	2,662
平均枝肉重量	283.5	288.0	282.4	276.4	278.4
輸出量	937	948	1,014	1,184	1,349
1人当たり消費量	33.9	31.9	32.6	31.7	29.3

資料：MLA「Statistical Database」

注1：年度は7月～翌6月。

2：と畜頭数の単位は千頭。

3：生産量と輸出量の単位は千トン。

4：平均枝肉重量と1人当たり消費量の単位はキログラム。

5：生産量および1人当たり消費量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。

6：と畜頭数には子牛を含む。

7：生産量、輸出量および1人当たり消費量は子牛肉を含む。

8：平均枝肉重量は成牛のみ。

#### イ 輸出動向

牛肉輸出量は、近年の牛肉生産量の増加傾向を受けて、2009/10年度以降、増加傾向で推移している。2014/15年度の牛肉輸出量（船積重量ベース）は、干ばつに伴う牛肉生産量の増加を受けて、過去最高の134万9000トン（前年度比13.9%増）となった。主要輸出先別に見ると、これまで最大の輸出先であった日本向けは、30万3500トン（同8.5%増）とかなりの程度増加したが、米国向けが、米国国内での牛肉生産減に伴う挽き材輸入需要の増加を受け、47万1200トン（同77.2%増）と大幅に増加し、国別シェアで日本を上回った。韓国向けは、堅調な需要から15万6900トン（同0.8%増）とわずかに増加したが、中国向けは、ブラジル産との競合により12万4800トン（同22.2%減）と大幅に減少した（表9）。

表9 牛肉の国別輸出量の推移

（単位：千トン）

国名/年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15	輸出シェア (14/15)
日本	351.4	325.8	298.8	279.7	303.5	22.5%
米国	160.0	205.2	206.6	265.9	471.2	34.9%
韓国	139.2	122.8	137.7	155.7	156.9	11.6%
中国	7.2	7.7	92.3	160.4	124.8	9.3%
その他	286.7	286.7	278.5	322.7	292.6	21.7%
合計	937.3	948.3	1,013.9	1,184.4	1,349.0	100.0%

資料：豪州農業水資源省（DAWR）

注1：年度は7月～翌6月。

2：船積重量ベース。

## ウ 消費

1人当たり食肉消費量を見ると、他畜種と比べて安価であることや消費者の健康志向を受けて、近年、鶏肉が増加し、2000年代後半に牛肉を逆転した。

2014/15年度は、鶏肉が45.3キログラム（前年度比1.4%増）と増加傾向が続いている一方、牛肉は、小売価格の上昇により29.3キログラム（同7.6%減）と、2年連続で減少した（表10）。

表10 1人当たり年間食肉消費量の推移

（単位：キログラム）

区分/年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
牛肉	33.9	31.9	32.6	31.7	29.3
マトン	0.9	0.1	0.3	0.4	0.5
ラム	9.4	9.4	9.6	8.9	9.4
豚肉	25.1	25.9	26.7	25.1	26.1
鶏肉	44.3	44.0	44.1	44.7	45.3
合計	113.6	111.3	113.3	110.8	110.6

資料：MLA [Statistical Database]

注1：年度は7月～翌6月。

2：牛肉には子牛肉を含む。

## ④ 生体牛輸出

生体牛輸出は、インドネシアなど東南アジア諸国向けの肥育もと牛が中心となっている。最大の輸出先で全体の過半を占めているインドネシア向けについては、経済成長に伴い増加傾向となっていたが、同国が2010年以降、国内生産振興のため、輸入制限的な政策を開始したことから、2011/12および12/13年度の生体牛輸出頭数は一時的に減少した。しかしながら、2013/14年度以降、同国の輸入制限の緩和により再び増加し、2014/15年度は137万7500頭（前年度比21.5%増）と大幅に増加した。その他の国では、ベトナム、イスラエル、中国向けが、いずれも大幅に増加している（表11）。

表11 生体牛の国別輸出頭数の推移

（単位：千頭）

国名/年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15	輸出シェア (2014/15)
インドネシア	457.4	376.1	271.3	623.7	746.2	54.2%
イスラエル	53.4	60.5	67.2	107.7	65.7	4.8%
中国	50.9	58.9	59.2	94.1	79.5	5.8%
マレーシア	20.6	20.0	38.5	55.3	52.9	3.8%
フィリピン	15.9	23.9	37.0	19.6	27.0	2.0%
ロシア	18.4	36.9	36.3	50.1	39.3	2.9%
トルコ	100.9	37.4	35.6	0.0	2.4	0.2%
ベトナム	1.4	1.4	15.9	131.0	309.5	22.5%
エジプト	23.1	32.1	15.3	8.0	19.9	1.4%
日本	12.7	14.9	11.2	11.6	9.9	0.7%
その他	50.3	21.2	46.1	30.3	25.3	1.8%
合計	805.0	683.3	633.7	1,131.3	1,377.5	100.0%

資料：MLA [Australian livestock export industry statistical review]

注1：年度は7月～翌6月。

2：乳牛を含む。

## ⑤ 肉用牛価格の動向

2014年の肉用牛の家畜市場加重平均価格は、1キログラム当たり308.5豪セント（前年比7.4%高）と上昇に転じた（表12）。これは、堅調な輸出向け需要や穀物価格の下落を受け、肥育農家の導入意欲が高まったためとみられる。

表12 肉用牛価格の推移（枝肉換算）

（単位：豪セント/キログラム）

区分/年	2010	2011	2012	2013	2014
若齢牛	349.2	385.8	368.0	327.9	349.1
肥育牛	321.5	343.3	333.3	318.1	337.1
経産牛	272.2	293.4	277.4	247.4	275.1
加重平均	304.9	333.9	318.7	287.1	308.5

資料：ABARES [Agricultural Commodity Statistics]

注1：いずれも、主要家畜市場の価格。

2：肥育牛は生体重500～600キログラム、

経産牛は同400～520キログラム。